

---

**まじこい？他でやってください！**

天叢雲

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

まじこい？他でやってください！

### 【Nコード】

N4155Z

### 【作者名】

天叢雲

### 【あらすじ】

テンプレな過去を持つ人付き合い苦手な主人公が乙女かいぶつから逃げまくり、捕まるお話。

最初は鬱っぽいけど徐々にコメディ化します。

注意：主人公は非転生者、チートだけどあまり戦わない、合法シヨ

タ+微男の娘、かなり厨二な力を持つなどがあります。注意してね

受難、すたーと。(前書き)

自分の出たアイデアで書く三作目。

原作知識はうる覚えだから気を付けて！

受難、すたーと。

貴方にとって、力とはなんですか？と聞かれるとどう答えますか？

ある者は暴力。

ある者は自分の誇り。

ある者は自分の人生そのもの。

ある者は自分を満たすもの。

ある者は……。

そして僕はこう答えるだろう。何があっても揺るがない答え。

“誰かの、小さな幸せをもたらせるもの”

「・・・またやってる・・・」

「キヤアアアア！川神先輩カッコいい！」

「さすがは百代さんだ！川神最強！」

いつもの日常、僕は学業をするために学校へ行く。  
父と母は僕を気味悪いと捨て、今まで一人で生き、ある親切な人からの援助でこうして勉強ができている。

通学路の途中、橋の下の川原では朝の恒例とも言える光景が広がっていた。

それは僕が通う川神学園の最強の武術家と言われる川神百代先輩。

あの人に勝ち、名を上げようとするものがこうして川神先輩に挑戦をし、ことごとく敗れ去っているのだ。  
今日も川神先輩が圧勝し、倒した不良たちの関節をはずしたりして人間テトリスなるものをしていた。

「・・・・・・・・」

僕はそれをただ、冷めた目で見ていた。

たとえば、喧嘩を売った不良たちが悪くてもあれはやりすぎだ。

あんなのが最強の武術家だなんて僕は思いたくはない。

「よーし！できた！」

川神先輩は人間テトリスを完成させると蹴りで不良たちを崩した。

・・・なんであんな楽しそうに出来るか僕には理解できない。

それにギャラリーもなぜ止めないであんなにはしゃぐかも理解できないよ。

「・・・僕が、おかしいのか？」

こんな光景を見ると自分がおかしいのかと目眩がする。

これが常識なら僕は非常識なのか錯覚してしまう。

僕はそれ以上見ていられなくなり、足早にその場を去る。

「・・・またあいつか・・・」

それを川神先輩が見ていたのも僕は知らなかった。

それが日常。僕がいつまでも馴染まない日常であり、嫌う日常だ。

「・・・あれ？どうしたの？」

「！川神さん・・・？なんで？」

「もう。私は一子、ワン子でもいいって言ってるでしょ？」

「・・・またなの？川神さん」

橋を急いで渡り、通学路を歩いていると一人の同級生がタイヤを引き摺りながら話し掛けてきた。

川神一子。川神先輩の妹さんで川神学園でも有名な生徒である。

川神姉妹は川神学園の学長である川神鉄心の孫でもあるため、有名にならないはずはないのだが。

だが僕はどうしても川神の名を好きになれそうにない。

昔に世話になったあの人は川神鉄心によって殺されたから・・・。

「・・・ごめん。川神さん、もう行かなきゃ」

「え？あ、ちよつと待ってよ！」

この人は悪くない。そう思ってもやはり我慢がならない。

再び足早に歩き、川神学園に向かうことにした。

後ろで川神さんが何かを言っていたが、僕は聞こえないフリをして立ち去った。

「・・・」

「ワン子？どうかしたのか？」

「あ、お姉さま・・・またあの子と話したんだけど無理だったわ」

「あいつか・・・あんな根暗に構う必要はないんじゃないか？」

「違うわお姉さま。あの子の目・・・昔の私に似てたから放っておけなくて・・・」

「ふーん。ま、ほどほどにな

（あいつ、何かがおかしい。私でも計り知れないような力を秘めている気がする・・・戦ったらどうなのだろうか？）

所変わって川神学園

「よー。昨日のあれ見たか？」

「おう。いい声してるよな」

八時。僕は学校に間に合い、自分の教室である二年F組の自分の席で静かに本を読む。

周りは騒がしいが、僕はいわゆる人間不信一歩手前なので人付き合いは苦手だ。

だからこそ、あまり人とは関わりたくないのだが、あの人と約束をしたため、学校には通っている。

「でさー」

「へーまじかよー」

「そうそう」

「えー！うっそー！」

「あのイケメンカッコよかったよー」

・・・正直、嬉しい。

人付き合いなんてあまりしたことないのに学校生活は無理があったか。

「やべ！そろそろ来るぞ！」

「寝てるやつ起こせー！」

「おい、またDVD出しっぱなしだぞ」

「おっといけね」

クラスメイトが慌ただしく動くのは担任の教師が来るからである。まあ、鞭で叩かれるのは嫌だろうから当たり前だろう。

僕は読んでいた本を閉じ、付けていたイヤホンも外して鞆に仕舞う。

「よーし。じゃあ出席を取るぞー」

こうして僕の川神学園での学校生活がまた始まる。

受難、すたーと。(後書き)

微妙なところで切ります。

風間ファミリーにまだクリスとまゆっちはいません。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4155z/>

---

まじこい？他でやってください！

2011年12月15日00時50分発行